

【朝鮮語】

「近くて遠い国」の「近くて近い言語」

床屋は今日も暇だった。主人は手持ちぶさたにカミソリを研いでみたり、テレビをボーッと眺めたりしていた。と、その時、扉を押して男が入って来た。

「いらっしやいませ」

満面に笑みを浮かべて客を迎えた主人は、次の瞬間ぎょっとした。

長身で精悍な顔立ちの男が、どことなく日本人にはない雰囲気を出していたからではない。鋭い眼光の男の口から出た言葉に度肝を抜かれたのだ。

「頭、削ってください」

恐ろしくも悲しい、しかし笑えるこの話は、十数年前に本学で学んだ韓国人留学生が、日本に来たばかりの頃に実際に床屋で起こした「事件」である。

朝鮮語と日本語は語順が同じで、前置詞ではなく後置詞を用い、単語も同じ漢字語が多いため、互いに学びやすい外国語と言われる。日本に留学する外国人の中でも、韓国人はとりわけ日本語習得が早いため、クラスを別にして教えるという話も聞く。

「男」も、日本語を学び始めたばかりの留学生だった。そして韓国にいた頃、床屋で言っていた台詞「モリ カッカ ジュセヨ」を辞書で引いた。「モリ＝頭、カッカ＝削って、ジュセヨ＝ください」

それぞれの単語の最初に出てくる訳語だけを繋げた結果がこうなったのだが、「モリ」の次の訳語を見れば「髪」と出ていたはずだ。朝鮮語では「頭」と「髪」は同じ単語を使う。朝鮮語と日本語は「近くて近い言語」。馴染みやすい外国語であることを解くつもりだったのに、いきなり「安心してると落とし穴にはまる」という話から始めてしまった。いくら似ていても外国語。発想が違い、言葉の持つ概念が異なることがある。語順が同じ、と安心してると、落とし穴にはまる。でも、だから面白い。似ている中に見いだす違いは、日本人が韓国人と付き合うほどに感じるものと共通しているかもしれない。

朝鮮語は、主に朝鮮半島で使われている言語である。つまり朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国で主に使用されている（ここで「主に」と言うのは、朝鮮半島以外の地域でも、中国の延辺朝鮮族自治州やロシアの一部に朝鮮民族集団が存在して朝鮮語を喋っているし、この日本にだって在日朝鮮人がいる。また、韓国からの移民集団は米国、豪州、カナダ、ドイツなど世界各地に広がっているからだ）。両国は、それぞれ「近くて遠い国」と称されて来た。近年、韓国は日本人にとって随分と「近くて近い国」になって来た感があるが、朝鮮民主主義人民共和国は依然、否、もしかしたらこれまで以上に「近くて遠い国」になっているのかもしれない。

いずれにしても、南北に分断された両国で、言葉は同じ朝鮮語を使う。ここで言う朝鮮語とは、北で使われる言語を意味しているのではない。現在の韓国で使われている「韓国語」も含めて、統一的な呼称としての「朝鮮語」である。ちなみに、近年「ハングル語」という呼称が一部に流布しているが、これは間違いだ。ハングルは朝鮮の文字のことなので、ハングルに「語」を付けるのは笑止千万と言わざるをえない。

もちろん、分断から 65 年を経て、南北には発音、語彙、文法、正書法などに違いが生まれている。在日朝鮮人は日本語訛りの朝鮮語を話すし、在米韓国人も世代を重ねるにつれ英語訛りの朝鮮語を話すようになっていく。しかし、それぞれの発話は十分に通じるもので、南北の文法体系も大きく異なるものではない。これに寄与したのが、1921 年に「朝鮮語研究会」として結成され、31 年に改称した「朝鮮語学会」である。日本の植民地支配下で日本語が「国語」とされ、朝鮮語使用が禁止された時代に朝鮮語学会は大弾圧を受けることになるが、1933 年に学会が制定した「ハングル綴字法統一案」、同じく 36 年にまとめた「査定した朝鮮語標準語集」があったおかげで、南北の正書法等に大きな違いが生じることなく、その後のそれぞれの改訂を経ながらも、基本的な部分で統一性を保つことができていると言える。現在、日本で採用されている朝鮮語の文法、綴字法等は、情報の多い大韓民国のものが主流で、一橋の授業でもこれに準拠することになる。

さて、その朝鮮語の学習法である。

「理解する」のではなく「慣れろ」に尽きる。「慣れる」ためには当然、量が必要になる。たくさん聞き、たくさん読み、書き、発話することが重要であることは、他の外国語学習と同じだ。もし違いがあるとしたら、それはやはり両言語が「似ている」ことに起因する学習法の違いと言えるだろうか。何度も言うが、基本的な語順が同じなので、単語をたくさん覚えて置き換えれば、かなりの意思表示ができる。他の外国語が、読めて聞けても、なかなか話せるようにならないのに対し、朝鮮語は簡単な意思表示なら、日本語発想で単語を置き換えれば何とかできることが多い。もちろん冒頭の例のように、そう思っていて大恥をかくようなこともあるが。

これに対して、聞けるようになるには、それなりの時間がかかる。発音に耳を慣らすのは一苦労だ。だからこそ、たくさん聞いて慣れる学習法を最初からお奨めする。

私は成人にも長く朝鮮語を教えて来たが、これまでに舌を巻いた例を二つだけ挙げておく。

一つは、1 年間独学したが、体系的に学びたいと言って来た女性。彼女の独学法はインターネットを利用して、韓国のテレビドラマをひたすら見続けるというものだった。KBS、MBC、SBS という地上波 3 局が、リアルタイムでインターネット放送をしていて、誰でも無料で視聴できる（残念ながら現在は会員登録が必要で、会員登録のためには韓国の住民登録番号が必要なため、事実上、日本人には視聴が難しい。しかし、現在では様々なサイトや放送を通して韓国ドラマの視聴ははるかに容易になっているのは言うまでもないだろう）

ため、彼女はじっとドラマを見続けたのだという。ドラマなので、ずっと見ていると、なんとなく話の筋が見えて来て、言っていることが徐々に分かって来たとか。加えて NHK の「アンニョンハセヨ」や独習書で自分なりに勉強して、1年でかなり聞き取れるようになったという彼女は、私のところに来た時には既にペラペラだった。「たくさん聞く」ことの大切さを示す例だ。

もう一つは、還暦を過ぎてライフワークとして朝鮮語学習を始めた夫婦の話。授業の場で覚えて帰るのは無理だと言って、この夫婦は毎回授業をビデオ撮影して帰り、1週間後の授業までの間、毎日繰り返しそのビデオを見ていたという。「授業で教えていただくこと以外は何もしていません」というその二人の語学力は、若い人に負けないどころか、私が今までに教えた生徒の中では1番と言っていい優秀な生徒だった。毎日、ビデオで繰り返し見られていることには少々閉口したが。

これに対して朝鮮語学習がうまく行かない例を二つ。

一つは、「外国語」即「英語」概念の人。英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語を勉強し、どれも、それなりの域に達しているという男性は、ついに「朝鮮語だけは馴染めませんでした」と辞めて行った。彼にとって外国語の基本は英語。「時制の一致は？」といった「文法質問」から抜け出せなかった。「英語を介在させないで、日本語から直に考えて」といくら言っても、英語の文法用語で考えることを辞められず、結局、朝鮮語を辞めた。

もう一つは、「朝鮮」への思い入れが強すぎて、「朝鮮語」に慣れることを何かが邪魔しているケース。これは見ている方も胸が締め付けられる。初めは何の思い入れもなく、なんとなく選択して、「似て非なる」言語の面白さにハマった人がどんどん伸びて行くのを横目に、思いが空回りしてどんどんヘコンで行くタイプ。こういうタイプには、リラックスして！と言うしかない。

以上の例が少しは参考になっただろうか。言葉は生き物。頭で考えるより慣れた方がいい。それでも、大人になって初めて学ぶ言語だから、文法説明はする。説明を「理解」するのが楽しい、または「理解」できた方が覚えやすい、という人は積極的に文法「理解」を楽しんでくれればいい。だが、「文法を聞くと思考停止になる」という人は、積極的に聞き流すべし。文章をたくさん読み、聞き、慣れることに集中した方が、必ず話せるようになる。

さあ、「外国語」への先入観を捨てて、肩の力を抜いて、「近くて近い」しかし「似て非なる」朝鮮語にトライしてみよう。